

### 【中3国語 『星の王子様』通読①】

『星の王子さま』といえば、「大切なものは目に見えない」という言葉が有名です。

緊急事態宣言後の遠隔授業では、国語科として生徒に何を伝えられようかと考え、『星の王子さま』の通読を行いました。コロナ禍においては人との距離を保つことを要求されています。学校に通うことも、人に近づくことも注意が必要です。けれど、人と人との心の距離が離れるようなことはあってはならないことだと思います。そこでこんな時代だからこそ今しかできないこととして、「想像力」をテーマに取り扱った『星の王子さま』を読みました。『星の王子さま』では、人が幸せに生きていくために「想像力」がどんなに大切かということが書かれています。

遠隔授業中に書いた生徒の考えをいくつか紹介します。(生徒はドキュメントというフォームに入力して教員に送信しました。)

生徒に与えた問いは、『『おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない)』についてあなたはどのように思いますか?』というものです。

以前CMで、子供は一日に400回笑うが大人は15回しか笑わないという言葉が流れていた。子供は無邪気に笑うとよくいわれるが、その”無邪気”な心を大人は忘れてしまっているのではないかと考えた。

大人がはじめ子どもだったことは、当たり前のことだ。しかし、それを忘れてしまうのは、現代社会が休む間もなく忙しく動いているからだと感じた。実際に街を見渡しても、機械のような顔で早歩きの人ばかりを見かけていた。大人は自分が子どもだったことを思い出す暇がないのだ。だからどんどん時が経って、いずれ忘れてしまう。しかし、今の自粛期間中はゆっくり時を過ごせている人が多い。自分が子どものとき考えていたことを思い出したり、子どものときやってみたかったことをやったりと子どもだったことを思い出す良い期間である。私はこの期間に子どもだったことを思い出す人は多いのではないかと感じた。もしそうでなければ、少し残念である。

大人はよく、「子供にはわからない、子供だから」といいます。私はこの言葉があまり好きではありません。たしかに子供には分からないことがたくさんあると思います。でも、子供からすれば、子供なりの素敵な意見、思いがあるのです。大人がそれも聞かずに「子供にはわからない!」と、ただその言葉だけで押さえ込み、子供の意見を言わせないなんておかしいと思います。大人にも子供の時代があったのなら、子供の気持ちがわかるはずなのに、どうして大人はわかってくれないの? 小さい頃、よくそう思いました。でも、自分が成長するにつれて、小さい頃の記憶や思い、感じていたことなんて忘れてしまう。だから、私は小さい子に関わる時は、自分の小さかった頃を思い出して、同じ目線になろうと思っています。今の私は、「大人よりも子供の気持ちがわかる」と思っています。大人になっても同じ目線というのを大事にしようと決めています。そして、いま感じていることや、小さい頃の記憶を大人になっても忘れないように、自分の宝箱に大切にしまっておこうと思います。

### 【中3国語 『星の王子様』通読②】

遠隔授業で本の全てを読むことはせず、学校が再開してから教室で本の続きを読みました。

下に掲載したのは、授業の最後に「星の王子さま」の中で心惹かれた表現について書いた随想です。

#### 【題：素敵な日々を過ごすために】

選んだ表現：「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだよ」

ネットで本を買ったことがある。頼んだ翌日から、私はウキウキした気分になった。家に早く帰りたくてしょうがなかった。ポストも一日に何回も確認した。普段と何も変わらないのに、「明日」が輝いて見え、待ち遠しかった。『星の王子さま』を読んで、なぜ私がこのような気持ちになったのかわかった。それは、自分が頼んだ「手間」をかけたものに対しての期待があったからだ。一日が美しいのは、どこかに「頼んだ本」を隠しているから。私は、このような「出来事の本質」について考えたことがなかった。だから、知ることができたとき、うれしかった。「期待」の心を持って生活すれば、その日は素晴らしいものになる。お金がなくても、生活に困っていても、日々の生活に「期待」を持つことはできる。私は、これは楽しい生活を送る基礎なのかと考えた。

#### 【題：人間関係を上手く保つ会話】

選んだ表現：「人は気の利いたことを言おうとすると、なんとなくうそをつくことがあるものです」

相手が言って欲しそうなことを、自分の言いたいことより優先して言うことはよくある。「本音」と「建前」の使い分けを上手くできなければ、社会に出たときに「失礼な人」だと思われてしまうから、なるべく相手の気分を害さないような言葉を選び、顔色をうかがった会話をしているはずだ。お互いを喜ばせ合えるような会話をしなければ、人間関係を上手く保つことはできないからだ。だから、大人になると、自分以外の人には本当のことを言えない生活になるのではないかと思ってしまう。また、相手の言っていることが本当だと信じ切ることもできなくなってしまうと思う。今も若干そんな気持ちになりつつある。だからといって、相手にすべてを誠実に話そうなんて気には怖くてなれないので、嘘ばかりの会話を、「仕方ない」と受け入れることしかできないままである。

#### 【それぞれの特別なもの】

選んだ表現：「ほんのちょっと、日の光がさしてくれば、それで満足してるんだ」

この紙をもらったとき、本当は別のことを書いていました。内容は「優しさ」についてです。そのこともお伝えしたいのですが、私はこういう時にいつも暗い話を書いてしまうので、内容を変えた方がいいのかと悩みながら空を見ていました。何故天気には「晴れ」「くもり」「雨」があるのかについて自分なりに答えを出そうと見ていたら、虹が出ていることに気がつきました。

きれいな半円ではなくて、とても短かったのですが、たまたま空を見ていた今日に限って出てきたことが嬉しかったのです。そして誰かに伝えたい気持ちになり、まわりを見てみました。しかし、その虹に誰も気がついていなかったのです。爆走で自転車を漕いでいる男の人も、歩いている同い年くらいの女の子もスマホに夢中でした。そのとき、「ああ、みんな特急列車に乗ったままだ」と思いました。家に帰り、祖父母に話しました。すると、祖母がすぐに見に行くと言いました。しかし、それに対して祖父は、その祖母の行動に対して、「何だそれ。どこかで雨が降っているだけだろう」と言いました。いつもはとても尊敬する祖父を、そのときは「やれやれ」と思ってしまいました。どこかで雨が降っているとか、そういうことじゃないと思うんです。いつもの「晴れ」の中に時々出てくる虹だから特別なんです。それは幸せということだと思うんです。あなたはこの幸せを分かっていたいただけますか？ 人の幸せはそれぞれだけど、この少しのことを特別だと思えることで、爆走で自転車を走らせていた人も、スマホに夢中の少女も幸せになれるのではないのでしょうか。「ぼく」が言っていました。「王子さまは、ほんのちょっと、日の光がさしてくれれば、それで満足してるんだ」と。ほんとうにその通りだと思います。今まで気づけなかった幸せを、王子さまに教えてもらうことができました。